

ブギスの森と海

前田 成文*

Forest and the Sea among the Bugis

Narifumi MAEDA*

This essay aims to portray the image of the forest and the sea perceived by the Bugis people in South Sulawesi, Indonesia. In a word the forest and the sea share the same image of ambivalence: both extremely maleficent and beneficent. Avoiding these ambivalent spheres, the people chose to live in an ecotone between the forest and the sea or aquatic areas. Owing to recent exploitation, however, this ecotone seems to have lost its meaning as the most suitable sphere of living for the Bugis. Thus the ambivalence in the forest and the sea have been mostly cleared but its magical part is still in the mind of people.

はじめに

森と海。これは必ずしも常に対になっているとは限らない。海は砂漠と対になることもある。例えばペルー沿岸のアタカマン砂漠。あるいは北アフリカやアラビア半島など。これらに対して熱帯のアジアに住む人々は、森と海との両方の恵みを享受してきた。東南アジアを、海域世界と捉える時には、海域というのは島嶼の熱帯雨林を可能にした海という意味で、極めて特異な海域である。いわば森と海とが密接に関連して人々の生業や生活を規定して、一定の伝統を作り上げてきたといえる。そしてこの地域では、森と海との狭間に住む人が、この地域の歴史の中心的な役割を果たしてきたのである。

そのような海域世界の人々の代表例としてしばしば言及されるのがインドネシアのスラウェシ島に住むブギス人である。海に向かって生きる農民というテーマで、海人としてのブギス人についてはすでに論じた〔前田 n.d.〕。本稿ではブギス人にとって「探求、流謫、彷徨」の世界〔Pelras 1982〕である森と海について若干の考察を行なってみたい。¹⁾

* 京都大学東南アジア研究センター；The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 本稿の資料となったのは、1975年、80年、82年、84年、89年に実施された調査結果である〔前田 1991〕。ただし、これらの調査は森あるいは海にかかわる調査ではなかったため、極めて断片的な資料をつなぎ合わせる作業しかできなかった。本特集号の付説的な役割を果たせばそれに超したことはない。

森

「樹木が多くこんもりと生い茂っている所」としての森は、樹木の大きさ、種類、密生度、広がりなどによってイメージが異なるのは当然であろう。日本語では、林、樹林などのほかに、「多数の高木が広い範囲にわたって、枝と枝とが接するように密生してる所」を森林と呼び、森とはイメージを若干異にしている。そのうえ、森（杜）は照葉樹林文化の最後の拠点としての鎮守の森のイメージが、イデオロギー的に強く付加されて最近に使われている [ベルク 1988: 115ff]。英語では自分たちの森とは違う種類の森を、ヒンディー語からの借用語 *jungle* で表現する。本稿の扱うスラウェシの森も「森林」という方がふさわしいのかもしれない。それにもかかわらず、森の語を使うのは、森林が翻訳語で、森をより客体化して見てしまうからである。したがって、本稿で森という時には、杜、林、樹林、森林の総称（あるいはそのように分化される以前の基語）として使うことにしたい。

ブギス語で森というのは *ale'* である。ブギスと文化的にも言語的にも極めて近接しているマカッサルでは、*romang* という語が使われる。Pangkajene の Bantimurung では *rombong* という。マレー語の *hutan* 系統の *utang* も使われないことはない。しかし、マレー語では人手の入っていない *hutan* を特に *rimba* というが、この *hutan/rimba* の対照はブギスにもマカッサルにもない。語を繰り返すと、似たもの、小さいものなどを表すが、*ale'kale'* あるいは *romang-romang* は低い木の生い茂っている藪（マレー語では *semak* か）の意味に使われる。

日本語では、森は山とも言われるが、ブギス語では山は *bulu* である。木は *aju* である。したがって、*hutan-gunung-kayu*（森—山—木）に関係のあるのはこの *aju* だけということになる。事実プロト・オーストロネシア語の再構築に当たっても、海関係の語は同系統の語が広く分布してみられるが、森、山に関しては必ずしもそうではないらしい。

森そのものではないが、海と対比的に用いられるのは、内陸である。海側 (*lahud*) 対陸側 (*daya*) [Blust 1988] は *alau* 対 *aja* となる。この対比は Bone では東/西の意味になる。しかし、海が西側にあるマカッサルでは *ilau/raja* は Bone とは逆に西/東を指すことになる。半島の南端にある Bantaeng では *ilau/raja* の対は南/北の方向を表す。Toraja は平地に住む Luwu の人から見た内陸の人であり、Ajatappareng は Tempe 湖の西に位置する Sidenreng, Sawitto, Suppa, Rappang, Alitta の地方を指す。

ブギスの森は他の熱帯雨林と比較的にいえば、香料などの森林資源には乏しい。木材、椰子、果樹、竹、鉄、鉱石などと猪、鹿、などの産出地であるとともに、焼き畑耕作の対象地でもあった [前田 1982: 126-128]。

敬虔なムスリムであっても、森の中に入る時には、アッサラーム・ナビ・スライマンと呼びかけて森の主ソロモンに森の中に入る許可を求める。いわば森は日常的な人間界とは異なった

異界と認識されているように見える。どのような異界であったかは、人々の森とのかかわり具合に応じてさまざまであろう。日常的／非日常的という二元論的な分け方自体、森と関わりのない人の発想のように思われる。森に対する「恐れ」ということも、主観的にすべての人が恐怖を持っていることを証明することはできないであろう。客観的な危険、病気ということも、はたして「客観性」を持って当事者たちに訴え得るのであるかという疑問ももたれる。せいぜい畏怖の対象となり得るが、そこには恵みの資源もある異界と捉えた方が良い。畏怖と恵みという両義的な世界なのである。人間に恐怖をもたらすと共に、守護者ともなる存在である。

森のもうひとつの顔は、略奪の対象ということである。そこに入って、何かを求めてくる場であるが、恵みを享受するというのではなく、積極的に森から奪い取る態度である。畏怖と恵みの森から、略奪対象としての森への移行はブギスの世界では案外早くやって来ていたのではなかろうか。山地の現状から見ると、ブギスの焼き畑耕作も、森林の自然回復のバランスを早くから崩してきたのではなかろうかと思われる。

具体的にブギス人にとって、森に住む人というのはどんな人かということは、他種族を呼ぶのに「森」の人という呼称を使うことからある程度は類推できよう。トラジャ、トアラというのは、平地、平野に住んでいるブギス人に対比させて、より劣っている人、人狩りの対象となり得る人々というイメージが強い。

しかしこの場合でも、森の両義性というのはあって、呪力において森住みの人の方が優れているということは、しばしば語られることである。例えば、Sidenreng のブギス人の祖先はトラジャの国から来た兄弟であるとされる [Lontara']。森の人に対する両義性は、森にはより多くの、より強力な超自然的な存在がいるということともかかわるのかもしれない。森と木とは必ずしも一緒ではないのかもしれない。次に述べるように聖なる木（例えば ajuara）の信仰はブギス人にも当然あるが、それは特定の木であって、森一般ではない。森と山と木というのはそれぞれがお互いのシンボルとして通底するが、同じものではない。ヒンドゥーのメルー山は南スラウェシ最高峰のラティモジョン山に比定される。しかし、神話の中でもラティモジョン山が特に重要な位置を占めているわけではない。村の中心が大木とされる例も多い。また地名に木の名前が多いのも、ブギス人と木あるいは植物一般との関係を考える上に参考になるであろう [Hammonic 1987: 155ff.]。

森の用益権が、国家による中央支配の浸透によって、登記される私有地となり得るようになり、新しい森林開発の技術もあいまって、商品作物を栽培するプランテーション化が進む。土地の私有化、人口増加、開発は、森の変造を急速に進めている。

海

海に生きる人と森とは密接に結びついている。海に出ていくためには船を造る材料を提供する森がなければならない。しかし、森があるからといって必ずしも船を造って海に出ていくとは限らないのはもちろんである。ブギス人やマカッサル人がジャワ海の中心的な種族となるのは16世紀から17世紀といわれる [Schrieke 1955]。それ以前は海に関係がなかった内陸的な人々かという、そうでもなさそうであったのは、神話から類推できそうである。イスラーム以前の神話とはいえ、ガリゴ譚 (Sure I La Galigo) はブギス人のメンタリティを窺う上には欠かせない資料であろう。²⁾

Sawerigading はガリゴ譚の主演であり、ブギス人の文化英雄でもある。彼の活躍は海の底、海を舞台としての探索・探究、ある意味では Luwu からの流離であり、まだ見ぬ Cina の国を訪ねての彷徨の旅でもある。これが森ではなく、海であることに、海に対するブギス人の思い入れが窺える。彼が船出していくための船の材料は welenreng という大木である。この木を倒すために彼と双子の姉妹の呪力を借りなければならず、この木に世界中の鳥の卵があったので倒れた後に大洪水が起こり、船の完成は海底の神々の力を借りて行われたという。

Sawerigading 信仰を今も強く持っている Tolotang [前田 1991] によれば、原初の世界は水だけからなっていた。ここに天上の神が陸を創って、天から神の子を送ったことになっている。カオスと海との関連が窺える。さらに Tolotang の伝承によれば、Tolotang の To の語源は人の意味ではなく、木、根源という意味であるともいう。lotang は lautang であり、ブギス語での普通の意味は「南」であるが、更にその起源をさかのぼれば、「海」ということである。

Sawerigading は海の彼方の土地に伴侶を求めて航海して行くわけであるが、天上の神が地上に降された時の婚姻相手の故郷は海の中である。天神の子 Batara Guru の妻 We Nyili' Timo は、地下界の神 Guru Risering の娘 (彼にとって MBD にあたる) で、東の海の泡の中から出現する。Batara Guru 自身は竹の中に入って雷と共に地上に送られてきたのと対照的である。

ブギス人の天上 (Boting langi' 天の屋根) —地上一地下 (海底) (Urilliu' 土地の下の世界) の三元的世界観は建築にも現れている。穀物をしまう屋根裏部屋、人間の日常寝起きする高床、家畜等の徘徊する床下の三つに区分されるというわけである。神話では、地下、海底の世界は天上の世界と等価であり、しかもそこの生活は地上と同じであるとされる。

このブギス人の三元的世界観は太陽—月信仰、東西軸、および現実の地名と関連させて考えられるが、もうひとつ山 (ri aja') と海 (ri lau') との対比も神話のみならず、現代の地名にもなお残っていることに注目すべきであろう [Hammonic 1987: 227]。

現代のブギス人に目を向けると、森への同定より、海へ自分たちを結びつけようとする努力

2) R. A. Kern の *Catalogus* のインドネシア語訳が1989年に Gadjah Mada 大学出版局から出版された。

をしているように見られる。例えば、民族名の語源解釈にもそれが見られる。Luwu' あるいは Ugi' (Bugis の元の形) は、To lu' pabbugi' すなわち魚を捕りに行く人々という語から起源してい、Mandar は To menre' (海から上ってくる人)、Makassar は To Makkasa', To Mangkasa' (白い着物を着て波を乗り切る人) であるとする [Mattulada 1982: 7]。

もうひとつ海に関してよく引用されるのは、1615年オランダ東インド会社とその貿易権益を守るために香料諸島でのローカルな交易を禁止したのに対する王の反論である。次のように主張したことが同時代のオランダ人によって記録されている。「神は土地と海を創られた。土地は人々に分かち与え、海は共有のものとして与えられた。いかなる人でも海を航海するのを禁止されたということは聞いたことがない。もしそんなことがなされたら、それは人々の口からパンを奪い取るようなものである」。³⁾

航海の自由はともかくとして、漁業権、地先権、漁区の所有権などに関する資料は少ない。海法といわれているものは、すべて交易、航海に関する航海法、商業法である。⁴⁾ 伝統的な海の領域に対する認識というのは、たとえば、Mandar の roppo による地先権の確認にも見られる [Baharuddin 1982: 78]。しかしローカルな対応の仕方以外に、一般的に論じられるような海の領域権はないようである。地先に労働投資を行なった場合には土地と同じように所有権あるいは用益権が出てくることは間違いない。例えばスラヤールの海藻養殖がそうであるし [Mapaimang 1989]、南スラウェシ全般にわたる沿岸陸化し開拓されたマングローブ林はもちろんであるし、上記の roppo による海域の設定もそのような用益権といえなくもない。

海というブギス語はジャワ語と同じ tasi' であるが、tawang, limbang, samuda などとも記録されている [Matthes 1874]。陸が見えない海原は dolangang と言われることもある。現代マレー語では tasek は湖の意味で使われるが、古くは海を意味し、塩辛い (asin, masin)、砂 (pasir)、シンガポール (古名 Tumasek) などは、語源的に tasek と関係があると考えられる [Willkinson 1957]。ブギス語で湖は tapparang (マカッサル語 tamparang) である。

森 と 海

森と海とは対極的な性質をもちながら、人間にとっては共に両義的な存在である。危険、恐怖と共に、恵み、希望をもたらす。両義的な森 (あるいは山) は川で海と結びつけられる。そこに住む人間は森とも海とも宥和していこうとする。例えば、アンバリタにおける penno の

3) Colenbrander, H. T. 1919-23. *Jan Pieterszoon Coen: Bescheiden omtrent zijn Bedrijf in Indië*. Den Haag. (未見) Stapel [1922: 14] より訳。Resink [1968: 45] Andaya [1981: 46] などとも引用している。

4) B. F. Matthes や L. J. J. Caron を踏まえて、インドネシア語と英語で Amanna Gappa の海法を紹介した Tobing [1977] 参照。

儀礼においても、神聖な山 Bulu Lowa への捧げ物と同時に、川の水、川への捧げ物も重要な位置を占める [Maeda 1990]。家の主は祖先が鱶であると信じられている。山の中に住むバンティムルンの人々は、一部の人は鹿との密接な関係を主張するが、多くの人にとって、5本の指を持つ鱶は祖先と関係があるとされる [前田 1982]。ジョホールのスンガイ・カランのブギス人の間では、家の守護神は虎であるが、漁の際には川の祖先に許しを請う [前田 1991]。

タニンバールに住む人のように、村自体を海亀に比定したり、船になぞらえたりするほどブギスの人の目は海に向いてはいない。樹木、植物との関係は神話の中に残されているが、森の動物は記憶のかなたに埋ってしまっている。この意味で鱶（あるいはその代替物）がごく最近まで社会的記憶としてとどめられているのは、その両棲的性格が重要であったのかもしれない。

生活環境としての選択

森に住むには、森林を伐りひらいて居住空間を作らねばならない。そこはあくまでも本拠地とは区別された出小屋であるが、決して森そのものではない。森に住む人は「森の人」としてブギスから区別される。マカッサル人でも山地に住む人はマカッサル・コンジョといって区別される。

海に住むには、やぐらを組んで家を作るか、船や筏の上に家を置くか、あるいは船の中に住むしかない。バガンと呼ばれる漁のための住居は、あくまでも漁の間だけの仮住まいである。家船生活者は通常 Bajau などといわれてブギス人とは別のカテゴリーとして扱われる。

ブギス人の生活空間は、広場があり、畑または水田がひろがった、水のある場所である。そしてそこには possi tana と呼ばれる世界の中心がある。それがブギス人の村の理念型であった [Mattulada 1975]。しかし、そのような、中世的、牧歌的な生活環境の選択は大変むつかしくなっている。隣の村との境にあった森はすでにない。村でさえも町的な様相を帯びるようになった。

エコトーンに近い生活空間の選択は今では必要がないのかもしれない。結界としての森はもうなくなってしまいつつあるのかもしれない。

お わ り に

ブギス人にとっての森と海ということを一般的に論じるのは大変むつかしい。本稿では、森と海とがブギス人にとっては等価であったのではないかということをまず言おうとした。共に両義的な価値を帯びている。

森と海とどちらの方が結界力が強かったかは時代的な変化があろう。少し前までは、森の方

がブギス人にとっては入りにくかったかもしれない。その前は逆かもしれない。ひとつ確かなことは、現代では森が海よりはるかに侵入しやすくなったことであろうか。

参 考 文 献

- Andaya, Leonard Y. 1981. *The Heritage of Arung Palakka*. The Hague: M. Nijhoff.
- Baharuddin Lopa. 1982. *Hukum Laut, Pelayaran dan Perniagaan*. Bandung: Penerbit Alumni.
- ベルク, オギュスタン. 1988. 『風土の日本——自然と文化の通態』篠田勝英(訳)筑摩書房。(原著 Berque, Augustin. *Le sauvage et l'artifice: les japonais devant la nature*. Editions Gallimard. 1986.)
- Blust, Robert. 1988. The Austronesian Homeland: A Linguistic Perspective. *Asian Perspectives* 26(1): 45-67.
- Hammonic, Gilbert. 1987. *Le Langage des dieux: cultes et pouvoirs pré-islamiques en pays Bugis Célèbes-Sud, Indonésie*. Paris: Editions du CNRS.
- Lontara' Mula Terbukanya Sidenreng. (Composed by A. Bulaeng; translated into the Indonesian by Pananrangi Hamid. 1984.)
- 前田成文. 1982. 「生活環境と社会組織——南スラウェシの一山村誌」『東南アジア研究』20 (1): 114-137.
- . 1991. 「フロンティアの文化動態」『東南アジアの文化』前田成文(編), 259-293ページ所収. 弘文堂.
- . n.d. 「流動『農』民ブギス」『海人の世界』秋道智弥(編), 同朋舎所収予定.
- Maeda, Narifumi. 1990. Household and Religion: The Problem of Identity in a Bugis Community. *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 28 (1): 3-19.
- Mappaimang Rahim. 1989. Kampung Polong: Sebuah Tinjauan tentang Kemiskinan Kaum Nelayan. In *Persepsi Sejarah Kawasan Pantai*, edited by Mukhlis, pp. 367-418. Ujung Pandang: P3MP, Universitas Hasanuddin.
- Matthes, B. F. 1874. *Boegineesch-Hollandsch Woordenboek*. 's-Gravenhage: M. Nijhoff.
- Mattulada. 1975. Latoa: Satu Lukisan Analitis terhadap Antropologi Politik Orang Bugis. Ph. D. thesis, Universitas Indonesia.
- . 1982. South Sulawesi: Its Ethnicity and Way of Life. *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 20 (1): 4-22.
- Mukhlis, ed. 1988. *Dimensi Sosial Kawasan Pantai*. Ujung Pandang: P3MP, Universitas Hasanuddin.
- , ed. 1989. *Persepsi Sejarah Kawasan Pantai*. Ujung Pandang: P3MP, Universitas Hasanuddin.
- Mukhlis; and Robinson, Cathryn, eds. 1985. *Masyarakat Pantai*. Ujung Pandang: Lembaga Penerbitan Universitas Hasanuddin.
- Pelras, Christian. 1982. La mer et la forêt, lieu de quête, d'exil, et d'errances: quelques aspects de l'univers légendaire bugis (Célèbes, Indonésie). *Le Monde Alpin et Rhodanien*: 313-321.
- Resink, G. J. 1968. *Indonesia's History between the Myths*. The Hague: W. van Hoeve.
- Schrieke, B. 1955. *Indonesian Sociological Studies*. The Hague: W. van Hoeve.
- Stapel, F. W. 1922. *Het Bongaa's Verdrag*. Leiden: Rijksuniversiteit te Leiden.
- Tobing, Philip O. L. 1977. *Hukum Pelayaran dan Perdagangan Amanna Gappa*. Ujung Pandang: Yayasan Kebudayaan Sulawesi Selatan.
- Whitten, Anthony J.; Muslimin Mustafa; and Henderson, Gregory S. 1987. *The Ecology of Sulawesi*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Wilkinson, R. J. 1959. *A Malay-English Dictionary (Romanized)*. London: Macmillan.